



なぎさは海のゆりかご

海のゆりかご通信 No.19 Mar.2011

～ 藻場・干潟・サンゴ礁・ヨシ帯・浅場… 「なぎさ」は人と海との共生の場 ～

「なぎさシリーズ」

今回の旅は、“薩摩富士”とも呼ばれる見事な円錐形の山容を持つ開聞岳（かいもんだけ）にほど近い、鹿児島県指宿市山川地区。地元で奮闘する若き漁師に、作家の吉村喜彦さんが出会いました。

なぎさシリーズ No.15

「アマモ少年団よ、大志を抱け」

吉村喜彦

◆ 魚売り漁師 ◆

薩摩半島の最南端、錦江湾の入り口にある指宿市（いぶすきし）山川（やまがわ）地区。全国有数のカツオ水揚げ港である。

川畑友和（かわばたとまかず）さん（32歳）はこの町に生まれ育った漁師3代目。今年、漁師になって8年目の春を迎える。

5年間のサラリーマン生活に終止符をうって山川に帰ってきた。父親の営む定置網を手伝うためだった。

帰ってきて早速したのは「つぼ網」という少し効率の悪い漁法を「一段落とし網」



に替え、父がもっていた定置網をもう一つ増やし、2カ統にした。

おかげで魚も3倍近く獲れるようになり、サバやソーダガツオなどそれまで獲れなかった魚も獲れるようになった。が、それらの魚は養殖の餌などに使われるので魚価が安く、量のわりには水揚げ金額は上がらなかった。

——人が食べる魚を獲っているのに……。

いままでの流通に任せていると、小さかったり旬をはずれたりした雑魚（ざつぎょ）

	都道府県:	鹿児島県
	地域協議会:	鹿児島県藻場・干潟保全対策協議会
	活動組織名:	山川地区藻場保全会
	協定先:	指宿市
	構成員数:	53名
	対象資源:	藻場
	活動内容:	母藻の設置、海藻の種苗投入、アマモの移植及び播種、食害生物の除去（ウニ）、浮遊・堆積物の除去

は、魚が食べるものになってしまう。人に食べてもらうためには自分が売るしかない。しかも、その方が二束三文で買い叩かれるよりずっと良い値になるはず——。

そして始めたのが自宅で午前6時から7時まで開く朝市だ。お客さんのニーズに合わせて三枚おろしから刺身、丸物（1尾そのまま）まで毎日売り切れになる。若くてイケメンの川畑さんが、ご近所のおばちゃんたちの人気者になるまでそれほど時間はかからなかった。

「漁師やってる以上、無駄をだしたくないし、損したくない。魚の値段が安いと『じゃ、量で勝負だ』になってましたけど、よくみたいな小っぽけな漁師は少ない量をどう効率よく売るかが大事だと思います」

ただ魚を獲れば良いという旧来の漁師ではなく、直接お客さんと接する地点までを射程に入れる「これからの漁師」として川畑さんは出発したのだった。

お会いしたその日も、川畑さんは朝1時半起きだった。



まず定置網1カ統をおこし、獲れたアジの量を見て、前日の各港のアジ入荷を確認しつつ、やる量を計算。取引している5つの市場価格を予想して、その日は6時に始

まる鹿児島に向けて4時45分に軽トラを出した。競りを終えて山川に帰ってきたのが8時頃。朝食後、組合で打ち合わせ。そして10時過ぎにインタビューのために時間を割いてくれた。午後から夜までいつも網の修理に費やしている。睡眠は4時間あればいいほうだ。



「これだけの仕事は今しかできませんからね。今が漁師としてのピークの時なんです。だから今できることを今やっておかないと。年とってくると身体が続かなくなっちゃうから」

と白い歯を見せる。

◆ 若手漁師の挑戦 ◆

山川町漁協の正組合員のうち40歳以下は、川畑さんを含めて5人しかいなかった。若手のみんなとそれぞれ個別に話していると、漁業経営の厳しさや漁村の活性化など、共通の悩みをもっていることがわかり、川畑さんが中心となって05年9月に青年会をつくることになった。

「で、最初に何をするかをみんなで話しあっているうち『昔はどっさい魚が獲れた。海藻もどっさいあって櫓にからまるもんじゃった。最近は藻が生えんから魚がおらん』

という漁師の声を聞いたんです。正直いって、ぼくは『いったい何の話？』って感じでした。当時は自分の仕事に必死だったんで、藻のことなんてまったく興味なかったですから。でも話を聞いているうちに、刺し網をしている方々は藻がないと商売にならないというのがわかってきた。そして、『将来ぼくらが生き残るためには藻場を造成していこう。うまくいくかどうか分からないけど、やってみる価値はある。いまは自分たちの労働時間を削る無償の仕事だけど、将来ぼくらの魚が増える。巡りめぐって返ってくるんだ』と青年部全員が思ったんです」

それからメンバーは藻の勉強を猛烈に開始する。



当時、鹿児島県水産技術センター（以下、水技センター）にいた田中敏博さん（現在、県水産振興課）の門をたたき、まったくの白紙状態から手取り足取り教えてもらった。

まず手始めに自分たちの沿岸にはどこにどんな海藻や海草が生えているのかを知るべく、水技センターの協力のもと、現状調査をスタート。その結果をもとにアクションプランを立てた。

06年度から、ヒジキ、ホンダワラ、ワ

カメの3種の藻場造成を実施。07年度からアマモを追加。あわせて食害生物・ガンガゼ駆除にのりだした。



「ぼくらの唯一最大のパワーである体力&根性で、めったらやたらに活動したんですが、それも空回り……。ホンダワラとヒジキは失敗。ガンガゼは年数回の活動では全然減らなかった。でも、アマモとワカメ造成には成功。わけでもアマモはかなりの成功をおさめていると自負しています」

◆ 南限のアマモ場 ◆

そのアマモ場造成について話をうかがった。

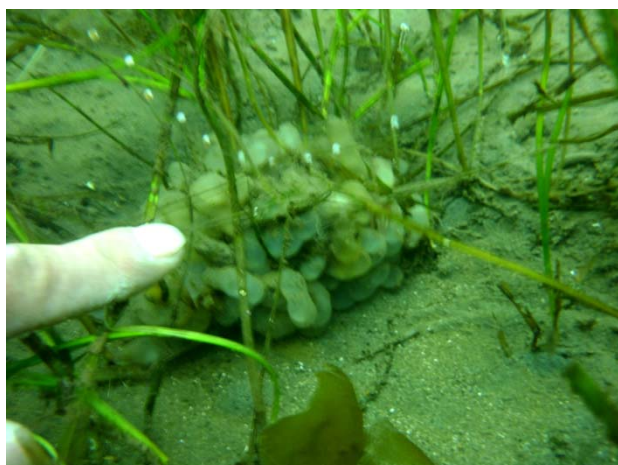
川畑さんは言う。

「山川のアマモ場は一年生アマモ（1年で生活史が完結する）の日本の南限地で、アオリイカの産卵場所にもなっています。

アマモは他の藻類と違って、花を咲かせて種で繁殖する海草です。

一年生アマモは、冬に芽を出し、春に繁茂、夏に花を咲かせ結実して枯れる——という1年間のライフサイクルですから、年によって分布面積がかなり変わります。そうしたアマモ場を安定的に保全しようと、この活動をはじめました」





(アマモに産みつけられたアオリイカの卵)

川畑さんは「アマモマット」を使ったアマモ場造成から活動を開始した。

「1メートル四方ほどの座布団を想像してください。アマモの種と肥料と土と糊を混ぜ込んだものをその座布団に入れる。その座布団がアマモマット。座布団は半年ほど腐ってなくなる」

なくなる——？

「要するに、座布団の中から芽が出てきて、根っこも出てきますよね。で、座布団がそのまま残っていたら、波がくるとぜんぶ剥(は)がれてしまう。でも座布団が溶けてなくなれば、根がそのまま海底につきますよね——そういう特殊な座布団がアマモマットなんです」



(アマモマットの設置状況)

なるほど。うまく考えたものだ。

「一年生のアマモの大敵は台風なので、シーズンの終わった10月下旬にマットを設置しました。すると12月くらいに芽が出て、翌年5月には1メートル50センチくらいまで伸びて実をつけ、6月に枯れてなくなった。それからは砂漠状態が続くんですよ。この間はドキドキものです。種がちゃんと海底についたのかなあって。

で、落ちた種が10月から徐々に芽を出しはじめた——。



このとき、めっちゃうれしかったんです。

アマモの種って目に見えるし、なんだか思ったより簡単だなあってポジティブな先入観もっちゃったんです(笑)。たまたま台風が来なかったんで、ラッキーだったんですけど。

と同時に『これなら子どもでもできる!』と思った。そんなおり、第1回アマモサミット(08年)が横浜で開かれたんです」

この会場で川畑さんは衝撃を受けた。山川よりも都会の小学生の方がずっと海に親しんでいるのがわかったからだ。

「ぼくのイメージでは都会の子どもたちは山手線の駅を全部言えるけど、自然と触れあうなんてないだろうと高を括っていた。

でも、そんなことはまったくなくて、かえって地元の子どもたちの方が海で遊ばないし、お家でゲームばかりしている。海で泳ぐ子なんていなかったですから。親が行かせないという のもあるでしょうけど。でも、ぼくはそういう状況を引っ繰り返したいと思った。子どもたちを海に連れていきアマモのことを一緒にやって、しかもアマモサミットを地元で開催して、指宿の子どもたちに発表させてやるぞと横浜の会場で誓ったんです」

早速、川畑さんは地元の小学校や保護者と交渉。子ども会活動の一環としてプロジェクトを始めることになった。



(小学生とアマモの勉強会)

まず最初にしたことは、県の水技センターを借りて、子どもたちに海藻の種類や藻場と魚の関係などを楽しく学んでもらうことだった。子どもたちは水族館みたいな水技センターに大いに興味をもった。さらに県の調査船に乗せ、漁協の超低温冷蔵庫に入れてあげ、最後にはカツオのたたきを食べさせて——とあの手この手で子どもたちの好感・共感・親近感をもりあげ、アマモ場造成・子どもプロジェクトは好調にスタートしたのだった。

◆ アマモサミット ◆

2009年。子どもたちは「アマモマツト」のミニチュア版のような「ガーゼ法」を使ってアマモ造成をはじめた。医療用ガーゼで砂とアマモの種を包んで、海底に埋め込むのである。ガーゼ法はシンプルでわかりやすく、しかも安い。入門編としてはぴったりだった。



(ガーゼでアマモの種をくるんで植え付け)

「海で泳ぐのは初めてという子もたくさんいました。水中眼鏡に海パン姿で、胸くらいの深さの所まで行って、顔突っ込んで。気がついたら足だけ何本も出てるみたいな(笑)」

その翌年の秋には子どもたちの植えたアマモの種はみごとに芽を出し、緑いっぱいのアマモ場を形成することに成功した。

川畑さんは「自分たちの植えたアマモがしっかり生えているのを見たときの子どもたちの輝く目が忘れられない」と言う。

そして2010年11月。指宿で第3回アマモサミットを開催。川畑さんの念願通り、子どもたちは毅然とした姿でステージに立ち、アマモ場のことを熱く語ったのだ。



(アモモサミットでの発表)

◆ 冷静な情熱 ◆

川畑さんはポジティブな人である。「楽しさ」をつねに考えている。自ら楽しみたいと思っているからだ。

プレゼンテーションも上手い。よく居がちな「マーケッター」的な、「今これを言う」と受けられようとか「難しい言葉を使えばエラソーだから、みんなついてくるんじゃないか」などの邪心がない。上っ滑りなところがない。

皮膚感覚で考えるので深みがある。だから子どもたちにもわかるやさしい言葉で語る。



この環境・生態系保全対策事業でたいせつなことは、誰にでも「わかりやすい」こ

とであり「楽しい」ことだ。官僚言葉の漢字を並べても誰も共感しない。好感ももたない。親近感なんてさらさら生まれない。

水産関係者にだけわかる話をしても仕方がない。フツーにこの世の中に生きている人に、「いま藻場やサンゴ礁や干潟がたいへんなことになっていて、それを漁師は何とかしようとしてるんですよ」と伝えなければならない。数字や小難しい段取りをなんだかんだと語るのは、じつは自分がその本質をよく理解していないから、形で誤魔化しているのだろう。



ほんとにわかっている人はわかりやすい言葉で核心をつく。水産業界にだけわかる言葉（はたして漁師はわかるのだろうか？）で、関係者だけに広報して、はたして世の中にとって意味があるのだろうか。

ぼくは企業の宣伝部で18年間働いたが、そこで学んだのは「共感・好感・親近感」のある広告づくりであり、広報活動だった。

世の中を動かすことができるのは、発信者の「冷静な情熱」だ。楽しみながら、動くことだ。川畑さんのプロジェクトへの人の巻き込み方はいやらしくない。すべては「どうすれば楽しく活動できるか」から出発している。それは、つまり「どうすれば

楽しく生きられるか」という哲学に帰着する。

子どもたちがついてくることは、ほんとにすごいことなのだ。

川畑さんは、いまは1小学校の子ども会だけで実施しているこの活動を、4つの小学校全部に広げ、アマモ場再生の「山川アマモ少年団」をつくることを考えている。

「ぼく自身、32歳になっても腕白ざかりなんで（笑）」



少年団のTシャツを着たおじさん、おばさんが畑仕事をしてたら、きっと面白いだろうなあ。少年団のバンダナもいいなあ、と川畑さんと二人で話していると、いろんなアイデアが指宿の湯水の如く湧いてく

る。

川畑さんこそ、アマモ・ボーイなのだ。

そういえば、活動の港は「児が水（ちょがみず）」という。児（ちょ）とは子ども。児が水とは子どもの水。ボーイズ・ウオーターでありガールズ・ウオーターなのだ。

なるほど。ここはアマモ少年団に、そして、川畑さんにぴったりの海だ。児が水に川畑少年——これぞ天の配剤である。

写真（撮影：関根寛、提供：山川町漁協）

～ 著者プロフィール ～

よしむら のぶひこ
吉村 喜彦 氏

作家。

1954年大阪生まれ。

京都大学教育学部卒。

サントリー宣伝部勤務を経て作家に。

著書に「オキナワ海人日和」（カラカラ）、
「ピアボーイ」（新潮社）、「漁師になろうよ」、
「リキュール&スピリッツ通の本」（いずれも小学館）、
「食べる、飲む、聞く 沖縄 美味の島」（光文社新書）、
「こぼん」（新潮社）など。



— 東北地方太平洋沖地震について —

3月11日、東北地方太平洋沖地震と津波が三陸を中心とした漁村を襲いました。被災された方々、ご家族やご友人の方々のお気持ちを察するに、胸が締め付けられます。心からお見舞い申し上げます。

JF全漁連でも対策本部を立ち上げ、支援物資の輸送、義援金のお願いなどを行っています。皆さまとともに、災害復旧と今後の漁業と漁村文化の復興に取り組んで参ります。

詳しくは・・・

全漁連ホームページ(<http://www.zengyoren.or.jp/>)の「東北地方太平洋沖地震被害に係る声明」ならびに「JFグループ東北地方太平洋沖地震被害義援募金運動」をご覧ください。

